

オリーブの会通信

2024年10月20日第47号 (通巻53号)
オリーブの会
大阪府豊能郡能勢町平通101-453
tel/fax:072-737-9454
mail: oribunokai@gmail.com
facebook: oribunokai

مجموعة الزيتون



ガザ蜂起から1年

抵抗闘争は続く

1. ヤヒヤ・シンワールの殺害をめぐる、

指導者の殺害は、抵抗運動の終わりではない。パレスチナの様々な抵抗運動の指導者は、イスラエルのテロによって殺害されてきたが、抵抗運動は発展してきた。イスラエルは自らのテロを正当化するためにパレスチナの指導者たちをデマで悪人に仕立てようとしてきた。

今回も、イスラエルのデマが暴露された。イスラエルはシンワールは地下のトンネルで、人質を盾にしてこもっていると宣伝してきたが、シンワールは、地下にもいず、人質もつれず、一人の戦闘員としてイスラエル軍に対峙してきた。これが、ハマスのモラルであり、さんざん、パレスチナの腐敗した指導者が、安楽なところから、戦士を戦わせていたという歴史を変えるためにハマスは生まれてきた。イスラエルは、イスラエル軍をモラルの高い軍隊と自賛してきたが、ガザの戦場で暴露されたいのは、モラルなく腐敗した姿である。

10月7日のガザの抵抗運動の蜂起は、イスラエル人の大量虐殺を目的としたものではなく、人質を確保し、パレスチナ人の捕虜の解放を目的とするものであった。イスラエルがホローコースト以来の虐殺といっているのも

でたらめである。それは、当初イスラエル人の犠牲者は、1400人としてたのが、しばらくして、1200人に減らされた。その理由は遺体が焼かれて、ハマスカイスラエルの識別がつかなかったからであり、これは、イスラエル軍は、ハマスと人質を区別なく殺したことを意味している。また、コンサート会場で300人以上が殺害されたとしているが、ハマスの武器では300人を一挙に殺すことができず、イスラエル人の証言が明らかにしているようにイスラエル軍のヘリコプターが来て、無差別に発砲したものであり、ハマスが大量にイスラエル人を殺害したというのはデマである。イスラエル軍にはハンニバル指令という指針があり、人質をとられるよりは、人質ごと殺せという指針によるのだ。

大量虐殺がどのようなものかは、イスラエルのガザへの攻撃、レバノンへの攻撃で明らかになっている。

イスラエルは、抵抗運動のたたかいを口実にして、ガザ、西岸での民族浄化をおこない、イスラエルの誕生の時と同じように、テロで住民を追い出し、土地を奪うことを目指している。

オリープの会通信 第47号(通巻53号)

最初は、ガザの住人を南部に追いやり、シナイ半島へ追い出すことを意図したが、エジプトがそれを嫌い、実現しなかった。残るは、ガザ内でパレスチナ人を大量に殺害することである。

2. ますます明らかになる米国のダブルスタンダード

米国は、明確にイスラエルの保護者、支援者としての姿を明確してきた。国連での度重なる停戦決議を拒否権で妨害し、民間人の虐殺は批判しつつ、裏では、大量虐殺の武器をイスラエルに与え続けている。イスラエルはこれがある限り、いつまで戦争を続けることができる。米国は、停戦の仲介者としての資格はすでに失っている。イスラエルを本気で停戦させようとはしていない。イスラエルには自衛の権利があると繰り返し、パレスチナ人の民族自決権を認めようとしないう。パレスチナは占領下にあり、占領下の人々には抵抗する権利がある。イスラエル人は占領という事実を認めず、パレスチナ全体を神から与えられた土地として所有権を主張している。もともと中東ではイスラム教徒、ユダヤ教徒、キリスト教徒が共存してきた。宗教戦争というのとはなかった。

シオニストがイスラエルを建国することで共存関係が壊されてしまった。建国されたイスラエルは、欧州から来たユダヤ人が支配をした。中東出身のユダヤ人は2級市民として扱われた。欧州のユダヤ人はディアスポラで欧州に逃れたといわれているが、イスラエル学者でさえ、ディアスポラを否定し、欧州のユダヤ人はハザール人であり、パレスチナを自分の土地とするのは、根拠がないとしている。ネタニヤフはポーランド人であり、かれの故郷はポーランドである。彼らの言語は、セム語ではなく、スラブ語系のイーディッシュである。

パレスチナをユダヤ人のホームランドとしたの欧州のユダヤ人問題の解決のためであり、米、欧はシオニストを支援し、イスラエルを作ったのである。しかも、その背景には、ロスチャイルドなどのユダヤ財閥があり、その前に欧米がひれ伏したのである。

また、米国のイスラエル支持には、キリスト教福音派の存在があり、彼らは聖書をのまま信じており、神がパレスチナをユダヤ人に与えたと信じ、イスラエル建国は彼らが「福音の本質は、イエス・キリストの贖罪を信じることと、その恵み(再誕)のみによる救いという教義(世紀末的終末思想の末に世界全人類が救われる)である」という信念を持っている。そのため、世界最終戦争たるハルマゲドンを起こす器として、イスラエル政府を支持する特徴がある。

これも米国のイスラエルへの無条件支持につながって

いる。バイデンは自身がシオニストであると表明している。また、国務長官は、自らユダヤ人としてイスラエルを支持する立場にある。

その表では停戦をいったり、民間人の犠牲はすくなくとかのポーズを示すが、その裏で無条件に軍事援助を行い、イスラエルの防衛のために2つの空母打撃群を地中海に浮かべている。イスラエルは、いくらでも戦争を拡大することができる。

3. イスラエルは、テロリストを壊滅すると言っているが、実際のかれの行動は、民族浄化である。

ガザの住民に当初は、南部へ避難しろとあって、南部においやり、北部の攻撃をくりかえし、今度は、南部から東に行くように命令し、南部で破壊を繰り返し、さらに東で安全地帯とされてるところに爆撃を行い。ガザの住民が逃げるところがない状態にまで追い込まれている。さらに今年の10月には、ハマスが組織の再建をしているとして、北部ガザを再び攻撃し始めた。また、住民に退避を命令したが、住民もこれまでの経験からどこにも安全な避難場所がないことを知っており、命令に従わなかった。そのためイスラエル軍が直接住民を追い出し、そして、男性をことごとく逮捕し、残りの家族を追い出した。病院などに対しても退避を要求したが、動けない患者や新生児など放置することはできないと医者、看護師は撤退を拒否した。これも、アシファ病院で行われたようにイスラエル軍が直接乗り込んで排除することになる。

北部ガザへの攻撃は、ネツァリム回廊から以北でパレスチナ人を追い出し緩衝地帯にすると意図があり、その破壊は徹底されている。ガザの再占領の開始である。

ガザへの攻撃と合わせて、西岸での占領軍と入植者たちの実質的な併合への動きが強まり、抵抗勢力への徹底した攻撃が行われている。すでに以前のような警察的な行動ではなく、ガザと同じように戦争になっている。

オスロ合意の地区割も関係なく、自治政府はなににもできない状態に置かれている。その分若者立ちが自然発生的に武装抵抗を行っている。昨年10月以来700人以上が殺害され、5000人以上が負傷し、9千人以上が拘束されている。3500人以上が入植者や占領軍によって追い出されている。西岸では、検問所が多数作られパレスチナ人の移動が制限され、農民は収穫へアクセスができなくされ、また入植者たちによって襲撃されたりしている。

4. レバノンへの侵攻

イスラエル軍は、10月に入って、本格的なレバノン侵攻を開始し、ガザと同じ方法で、民間人に対する攻撃をおこない、病院などを攻撃し、さらには、ヒズボラの金

融機関、報道機関など軍事目標でないものまで攻撃している。また、同じシーア派の組織でアマル運動という非軍事的な運動の事務所までを攻撃している。この運動の指導者はレバノンの国会議長である。

そして、ベカー高原、パールベックという東部、北部への攻撃を行っている。

イスラエルの攻撃にも関わらず、ヒズボラの反撃は続いており、被占領地北部から、ハイファ、テルアビブなどへの攻撃を行っている。

ガザと同様、停戦の可能性は低く、米国もイスラエルのレバノンへの攻撃を止めようとしていない。

5、イランの動向。イスラエル、米国は、イランを中東での最大の脅威とみなし、様々な圧力やイスラエルによる攻撃が行われてきた。最大のものは、テヘランに滞在していたハマスのイスマイル・ハニヤ氏の暗殺である。イランも紛争の拡大はのぞんでおらず、イスラエルへの反撃も抑制のきいた反撃となっている。イスラエルがそれへの報復をすとしてしているが、米国が中東全体への紛争の拡大を恐れて、イスラエルを抑えている。

イランは、湾岸諸国、サウジ、ヨルダン、エジプトなど敵対してきたアラブ諸国を外相が周り、関係の修復を図っている。

イスラエルと米国が、中東において、サウジなどの反イランのアラブ諸国とアブラハム同盟をつくり、新たな中東での対立軸を作ろうとしている。この構想は、パレスチナ問題をアラブの大義から消し去り、イスラエルと

アラブの和平を実現するというものだが、ガザの蜂起で簡単に進められなくなっている

5、米国、イスラエルは、ハマスやヒズボラをつぶせば、「新中東」がつかれると考えているが、パレスチナ人が占領下で抑圧されている状況がある限り、抵抗運動はつづいていく。シンワールの最後の闘いは、パレスチナの人々を鼓舞している。そして、残忍なシオニストへの怒りは拡大している。イスラエルは民間人も痛めつければ、ハマスやヒズボラに批判の矛先が向かうと思っているが、実際には、ハマス、ヒズボラを支持する人々が増えている。なぜなら、残虐な抑圧者には力による抵抗しかないと人々は知っているからである。オスロの失敗は、シオニストと交渉はパレスチナの民族自決を実現するものではなかったし、形だけの自治政府は、パレスチナ人を守ることはできず、シオニストの手先になるしかなくなっている。米国などがいう2国解決は、実現不可能な状態にある。また、米国がそれを仲介しても、オスロ合意のように、イスラエルが有利になるようにするだけである。

5、 私たちができることは、より国際世論を高め、米国、イスラエルを孤立させることであり、ボイコット運動を通じて、経済的な打撃を与えていくことである。そして、困難な状況にあるパレスチナを支援し、連帯していくことである。



ハマス指導者が1年間も捕獲を逃れて殺害されたというニュースは、さらに大きな抵抗を生むだけであり、イスラエルはそれを利用してさらなる虐殺を正当化するだろう

ベレン・フェルナンデス
アルジャジーラのコラムニスト
2024年10月18日

ガザ市、エルサレムのアルアクサモスクでの緊張をめぐ

オリープの会通信 第47号(通巻53号)

ぐり、反イスラエル集会に参加するパレスチナのハマス支持者を見守るハマス指導者ヤヒヤ・シンワル氏(2022年10月1日)

ガザ市での反イスラエル集会に臨むハマス指導者ヤヒヤ・シンワル氏(2022年10月1日)[モハメド・サレム/ファイル写真/ロイター]

10月17日木曜日、イスラエルはガザ地区でハマス指導者ヤヒヤ・シンワル氏を殺害した。シンワル氏は、わずか1年余りで4万2000人以上のパレスチナ人の命を奪い、今やレバノンにも広がっている大量虐殺戦争における最新の「重要標的」である。

もちろん、シンワルの排除が大量虐殺の終焉を意味するわけではない。イスラエルのベンヤミン・ネタニヤフ首相は暗殺後の発表で「今日、我々は決着をつけた。今日、悪は打撃を受けたが、我々の任務はまだ完了していない」と明言した。

絶え間ない虐殺を前提として存在する国の権力者にとって幸運なことに、イスラエルの「任務」は完全に完了することは決してないだろう。少なくとも、イスラエルの血に飢えた暴力に抵抗するパレスチナ人とアラブ人がまだいる限りは。

しかし、シンワルの殺害により、イスラエルがガザに対する現在の戦争を正当化し続けることはますます困難になるだろう。ただし、正当化はイスラエルの主要な国際的支援国である米国にとってはまったく重要ではない。

実際、米国のジェノサイドへの共謀は、長い間シンワルの居場所特定への支援を伴ってきた。8月にニューヨークタイムズは、ジョー・バイデン政権がハマスのリーダーを「見つけるために膨大なリソースを投入」し、イスラエルに「地中探知レーダー」を提供し、米国の諜報機関に「シンワル氏の通信を傍受する」任務を与えたと報じた。

9月にイスラエルがバイルートでヒズボラの象徴的な事務総長ハッサン・ナスララを暗殺したのと同様、シンワルの殺害は、イスラエルの致命的な計画を逃れてきた同氏の実績を考えると、間違いなく象徴的な意味を持つ。

過去12か月間、シンワルはガザ地区に留まり、イスラ

エルに対する軍事作戦を指揮し続け、大量殺戮に対する国際的支援が不十分だと不満を言いながら世界中を飛び回ることを好むあるイスラエルの指導者よりも、はるかに勇敢な行動を見せた。

当然ながら、シンワルは西側諸国の企業メディアで、イスラエルを破壊しようとする殺人鬼として全面的に取り上げられてきた。なぜなら、それがイスラエルがその「任務」を遂行するのを可能にする物語だからだ。

一方、2018年のシンワルのインタビューの抜粋を見ると、ハマスのリーダーは破壊よりもむしろパレスチナの未来を築くことに熱心だったことがわかる。「もう戦わないと言っているのではない。もう戦争はしたくないと言っているのだ。[イスラエルによる][ガザの]封鎖が終わることを望んでいる。日没時にビーチまで歩くと、海岸で十代の若者たちがおしゃべりしながら、海の向こうの世界がどんなふうに見えるか、人生がどんなふうに見えるか考えているのが見える。それ休息である。そして、誰もが休息するべきだ。私は彼らが自由になることを望んでいる。」

ガザの難民キャンプで生まれ、イスラエルが暴力的に奪ったパレスチナの土地をめぐる戦った罪で20年以上投獄されたシンワルは、イスラエルがパレスチナ人の「自由」に課した制限を痛感していた。

明らかに、これらの制限は今や特に顕著だ。日没時にガザのビーチまで歩いて、イスラエルの恒久的な包囲や断続的な狂気の爆撃を受けていない場所での生活がどんなものか疑問に思うパレスチナ人のティーンエイジャーを観察するなんて忘れよう。

今日では、イスラエルがガザの病院を攻撃した際に生きたまま焼かれるパレスチナ人のティーンエイジャーを目にする可能性が高いかもしれない。

イスラエルは反シオニスト抵抗運動の主要人物を物理的に排除したかもしれないが、意識的にさらに大きな抵抗を生み出している。もちろん、それがなければ、利益を生む血まみれのイスラエルの事業は最終的に繁栄することはできない。

前述のニューヨークタイムズの8月の報道によれば、当時、米国当局はヤヒヤ・シンワルの殺害または捕獲が

ネタニヤフ首相に「大きな軍事的勝利を主張し、ガザでのイスラエルの軍事作戦を終わらせる意欲を高める可能性がある」と確信していた。

しかし、ネタニヤフ首相自身が今や明言しているように、イスラエルはシンワルとの「決着」はついたかもしれないが、「我々の任務はまだ完了していない」。

イスラエルが7月にシンワルの前任者イスマイル・ハニヤを暗殺した際、ロイター通信は、ハニヤは「多くの外交官から、ハマスの強硬派メンバーに比べて穏健派とみなされていた」と報じた。イスラエルが平和にまったく関心がないことを示すさらなる証拠が必要だったかのように。

米国の平和への関心については、昨日のシンワル暗殺後、バイデン大統領は「[米国の]特殊作戦要員と諜報専門家に、イスラエルの同僚と協力して、ガザに潜むシンワルや他のハマスの指導者の所在を突き止め、追跡するよう指示した」と自画自賛する熱烈的な声明を発表した。

バイデン氏によれば、これは2011年のオサマ・ビン・ラディン暗殺に匹敵するものであり、「イスラエル、米国、

そして世界にとって良い日」だ。

しかし、大量虐殺にとって良い日は、実際には良い日ではない。

ベレン・フェルナンデス

アルジャジーラのコラムニスト

ベレン・フェルナンデスは、『Inside Siglo XXI: Locked Up in Mexico's Largest Immigration Detention Center』(OR Books、2022年)、『Checkpoint Zipolite: Quarantine in a Small Place』(OR Books、2021年)、『Exile: Rejecting America and Finding the World』(OR Books、2019年)、『Martyrs Never Die: Travels through South Lebanon』(Warscapes、2016年)、『The Imperial Messenger: Thomas Friedman at Work』(Verso、2011年)の著者です。彼女はJacobin Magazineの寄稿編集者で、ニューヨーク・タイムズ、ロンドン・レビュー・オブ・ブックスのブログ、Current Affairs、Middle East Eyeなど、数多くの出版物に寄稿しています。



10月7日以降のイスラエル： 脱植民地化と崩壊の間

イスラエルで何が起こるかを予測するのは難しいが、歴史がヒントを与えてくれるかもしれない。

イラン・パペ

イラン・パペはエクセター大学のヨーロッパ・パレスチナ研究センター所長。

2024年10月7日

イスラエルのテルアビブで、イスラエルのベンヤミン・ネタニヤフ首相の政府に抗議し、10月7日にパレスチ

ナのイスラム組織ハマスがイスラエルに襲撃し、誘拐された人質の解放を求めるデモ参加者がイスラエル国旗と横断幕を掲げる中、警察は放水砲を使用している。2024年5月18日、イスラエル。ロイター/シャノン・ステイブルトン TPX 今日の映像
イスラエルのベンヤミン・ネタニヤフ首相の政府に抗議し、警察は放水砲を使用している。2024年5月18日、テルアビブで [ファイル：シャノン・ステイブルトン /ロイター]

2023年10月7日から1年が経過し、この記念碑的な

オリーブの会通信 第47号(通巻53号)

出来事とその後のすべてについて、私たちがより深く理解しているかどうかを探る時が来た。

私のような歴史家にとって、1年では重要な結論を導き出すのに十分ではないのが普通です。しかし、過去12か月に起こったことは、少なくとも1948年まで遡る、はるかに広い歴史的文脈の中にあり、19世紀後半のパレスチナにおける初期のシオニスト入植にまで遡ると言えるでしょう。

したがって、歴史家として私たちにできることは、1882年以来パレスチナの歴史的状況で展開されてきた長期的プロセスの中に過去1年を位置づけることです。ここでは最も重要な2つのプロセスについて検討します。

植民地化と脱植民地化

最初のプロセスは植民地化であり、その反対である脱植民地化である。昨年ガザ地区と占領下のヨルダン川西岸におけるイスラエルの行動は、この二つの用語の使用に新たな信憑性を与えた。それらは親パレスチナ運動の活動家や学者の語彙から、国際司法裁判所などの国際法廷の活動へと移行した。

主流の学界とメディアは、シオニスト計画を植民地主義、あるいはより正確には入植者植民地主義計画と定義することを拒否している。しかし、イスラエルが来年パレスチナの植民地化を強化するにつれて、より多くの個人や機関がパレスチナの現実を植民地主義、パレスチナ人の闘争を反植民地主義と捉え、テロリズムや和平交渉に関する比喩を捨て去ることになるかもしれない。

確かに、米国や西側メディアが流布している「イラン支援のテロ組織ハマス」や「和平プロセス」といった誤解を招く言葉の使用をやめ、パレスチナ人の抵抗と川から海までのパレスチナの脱植民地化について語る時が来ています。

この取り組みに役立つのは、分析と情報の信頼できる情報源としての西側主流メディアの評判が高まっていることです。今日、メディア幹部は言葉の変更に必死で反対していますが、最終的には歴史の間違った側にいることを後悔することになります。

この物語の変更は、政治、より具体的には米国民衆の政治に影響を与える可能性があるため重要です。より

進歩的な民主党员は、パレスチナで起きていることについて、すでにより正確な言葉と枠組みを受け入れている。

カマラ・ハリスが選挙に勝った場合、これが民主党政権に変化をもたらすのに十分かどうかはまだ分からない。しかし、イスラエル国内の社会崩壊、その増大する経済的脆弱性、そして国際的な孤立が、死んだ「和平プロセス」を復活させようとする民主党の空虚な努力に終止符を打たない限り、私はそのような変化について楽観的ではない。

ドナルド・トランプが勝った場合、次の米国政権は、良くても現政権と同じか、最悪の場合、イスラエルに公然と白紙委任を与えることになるだろう。

来月の米国選挙で何が起きようとも、1つだけ真実は変わらない。ガザでの大量虐殺と他の地域でのイスラエルの冒険主義を止める力を持つ人々が、植民地化と脱植民地化というこの2つの枠組みを無視する限り、地域全体を平和にできる望みはほとんどない。

イスラエルの崩壊

昨年、勢いを増した2番目のプロセスは、イスラエルの崩壊とシオニスト計画の崩壊の可能性でした。

パレスチナ人の土地を奪い、アラブ世界の中心にヨーロッパのユダヤ人国家を建設するというシオニストの当初の考えは、非論理的で不道徳であり、最初から実用的だった。

イスラエルが長年持ちこたえてきたのは、宗教的、帝国主義的、経済的理由から、同盟国がそうした国家を、同盟国が誰であれそのイデオロギー的または戦略的目的を達成するものとみなしてきたからである。たとえこれらの利益が互いに矛盾することがあったとしても。

アラブ世界の真ん中で植民地化と帝国主義を通じてヨーロッパの人種差別問題を解決するという同盟のプロジェクトは、正念場を迎えている。

経済的には、過去のように短期間で勝利する戦争ではなく、完全勝利の見込みがほとんどない長期戦に従事しているイスラエルは、国際投資や経済的利益にはつながらない。

政治的には、大量虐殺を犯すイスラエルは、ユダヤ人にとって、特に信仰や文化集団としての自分たちの将来はユダヤ国家に左右されず、むしろユダヤ国家がなくてもより安全かもしれないと信じているユダヤ人にとって、もはや魅力的ではない。

現政権は依然として同盟の一部だが、その加盟は政治全体の将来にかかっている。つまり、パレスチナで過去1年間に起きた大惨事、地球温暖化、移民危機、世界各地での貧困と不安定化の拡大は、多くの政治エリートが国民の基本的な願望、懸念、ニーズからいかにかけ離れているかを露呈したということだ。

この無関心とよそよそしさは挑戦され、それにうまく対処するたびに、イスラエルによるパレスチナの植民地化を支える連合は弱まるだろう。

過去1年間に見られなかったのは、パレスチナ内外の人々の見事な団結と、彼らを支援する世界的な運動の結末を反映するパレスチナの指導者の出現だ。パレスチナの歴史の暗い時期にそれを求めるのは無理があるのかもしれないが、それは起こらなければならないし、私はそうなると確信している。

イスラエルの大量虐殺政策、この地域での暴力の激化、

そしてメディアに支えられた政府によるこの破壊的な軌道への継続的な支援という点で、今後12か月は過去1年よりもさらにひどい状況になるでしょう。しかし、歴史は、これが国の年代記における恐ろしい章の終わり方であり、新しい章の始まりではないことを教えてくれます。

歴史家は未来を予測すべきではありませんが、少なくとも未来の合理的なシナリオを明確に表現することはできます。この意味で、パレスチナ人への抑圧が「終わるかどうか」という疑問は、今では「いつ終わるか」に置き換えられると言っても過言ではないと思います。「いつ」はわかりませんが、私たちは皆、遅かれ早かれそれをもたらすよう努力することができます。

この記事で表明された見解は著者自身のものであり、必ずしもアルジャジーラの編集方針を反映するものではありません。

イラン・パッペ

イラン・パッペはエクセター大学のヨーロッパ・パレスチナ研究センターの所長です。中東とパレスチナ問題に関する著書を15冊出版しています。



パレスチナは、過去1年間、イスラエル人による大量虐殺、戦争、76年間にわたる入植者による植民地化、土地の横領、先住民の食糧システムへの意図的な攻撃の絶え間ない攻撃に見舞われてきた。この暗い歴史は、パレスチナ全土（ガザ地区からヨルダン川西岸地区、およびパレスチナ南部の地域）で激化するイスラエル人入植者による植民地主義の激化を如実に物語っている。その結果は悲惨であり、前例のない悲惨な状況と破壊が今後も

続くと思われる。

イスラエルの占領は、組織的に暴力を行使し、資源を奪い、西岸の土地と重要なインフラを破壊してきました。これらの行動は、ガザ地域に人工的な人為的飢餓をもたらし、西岸の食料安全保障を悪化させました。この攻撃の中心は、土地の守護者であり、食料保護の基盤であるパレスチナの農民へのものであり、彼らの生計、文化的遺産、食料主権が脅かされていることです。それは、イ

スラエルがこれらの存在を消し、彼らの自尊心を断ち切り、土地とのつながりを断つことを目的としているからである。

イスラエルのガザに対する攻撃は、ガザ地区の農業部門を崩壊の瀬戸際に追い込み、かつて繁栄していた土地を破壊した。この破壊の規模は偶然ではなく、人道的利益を奪うための計算された試みであり、土地とそれに依存する人々の生活を破壊している。イスラエルの攻撃は、物理的土地だけでなく、ガザの食糧生産を支える非常に貧弱なインフラも組織的に標的にしている。目標は、パレスチナ農家が耕作、収穫、そして住民に食料を供給する能力を破壊し、人口を衰退に追い込むことである。

2023年10月7日と2024年9月1日の間、ガザの農業現場でのイスラエルの爆撃による破壊は壊滅的な惨事となった。FAOとUNOSat IIが衛星画像データをと地元の農業当局のデータを使用して調査したダメージ評価によると、破壊の程度は驚くべきものです。

イスラエル軍はガザの耕地を67.6度%を壊滅させさせ、合計15フィート353ヘクタールのうち10,183ヘクタールを侵食した。この数字は全社会の生計手段を奪われ、人々を食糧不安に陥れたことを象徴する以上のものである。

ハーンユニスを含む最も被害が大きかった地域では、農地の約1.5倍が消失した。農地の7割が前例のないほど壊滅した北ガザなどがある。この壊滅はガザの食料生産システムの主要構成要素に及んでいる。果樹園71.2%、畑作物87.11%、野菜畑58.5%が破壊された。一部の地域では、壊滅的な被害がほぼ及んでいる。たとえば、ガザ県では、果樹園と林地の86.20%が破壊され、耕作地は2,199ヘクタールから29ヘクタールに縮小しました。

同じように警鐘はビニールハウスの破壊である。それは、一年を通じた生産に必要なものです。ガザ全体では44.3%のビニールハウスが破壊された。ガザ市では破壊は全面的で99.7%に及んでいる。野菜の生産に必要なスペースが失われている。

破壊は農作物の生産は止まらず、ガザの農業インフラは組織的に破壊され、606軒以上の納屋、538軒のプロイラー農場、427軒の畜産農場が破壊され、数百の農業用牛、豚、家畜小屋も破壊された。もう一つの重要な食料源である漁業部門はイスラエルの攻撃で機能不全に陥り、ガザの食糧危機を悪化させている。さらに、ガザの水資源への攻撃は壊滅的であり、ガザ全体の半分を超える1,188の農業用井戸が現在も機能していない。この

状況をさらに悪化させている。最大の災害は、灌漑と環境の持続可能性に重要な役割を果たしているガザの廃棄物処理場の破壊です。イスラエルの攻撃により、太陽光パネル、主要な回収タンク、重要なインフラが破壊され、人道的危機と環境的危機の両方が悪化しています。

こうした大量虐殺行為は、パレスチナの農村共同体に対する非人道的な暴力であり、土地と資源の両方を奪っています。食料と必須資源を戦争の道具として利用することは、パレスチナ人に対する非人道的な組織的暴力の象徴となっています。主要農業インフラの破壊と17年間の封鎖により、ガザの自立能力は低下した。イスラエルの戦略は、ガザに軍事力の行使という手段を講じ、飢えたパレスチナ人を屈服させることを目的とした計画的な暴力行為として捉えることである。

同時にイスラエルの占領はヨルダン川西岸地区を著しく悪化させ、さまざまな形で同様の戦略を駆使している。パレスチナの農民はイスラエルの暴力に屈せず、土地の所有権を増やしている。イスラエル政府の物質的、思想的支援を受けた入植者は、木々を根こそぎにし、農地を汚染し、農地へのアクセスを遮断している。WEBSITE: イスラエル占領軍の絶え間ない暴力、イスラエルによる西岸の継続的な封鎖、急速に拡大する入植地の拡大、少なくとも793の移動障害の出現とともに、これらの攻撃は組織的にパレスチナ人の権利を剥奪し、民間の戦闘員が彼らの土地から撤退したり、その土地に到達したりするのを暴力的に阻止しています。土地、家屋、重要なインフラを破壊することで、これらの攻撃は人命を危険にさらすだけでなく、パレスチナ人の生活を脅かします。イスラエルの攻撃は戦略的に行われています。エリアCは、西岸で最大かつ最も肥沃な地域であり、イスラエル入植者拡大の主要ターゲットです。西岸の歴史的な食料供給源として、「エリアC」と呼ばれるこの地域は、パレスチナ人の生活、農業、栽培、食料システムにとって重要です。

UAWC ニュースより

イスラエルの忘れられたテロ

1982年8月2日、西ペイルートのサブラの町をさまようパレスチナ難民の老人。前日のイスラエル軍による14時間にわたる砲撃で広範囲に破壊された中 [AP Photo]

歴代の米国大統領はイスラエルのテロを非難し、抑制しようとしてきた。現政権も彼らの例に倣うべき時が来ている。

デレク・リーバート

著者、編集者、エписコパル平和フェローシップ顧問

2024年10月11日

国際刑事裁判所 (ICJ) が1月にガザで「文字どおりの大量虐殺」があったと認定し、その後イスラエルがヨルダン川西岸と東エルサレムのアパルトヘイト制度の責任を負っているとの判決を下したことは、トルーマン、アイゼンハワー、ジョンソン、カーター、そしてレーガン大統領にとっても驚きではなかっただろう。レーガン大統領は、イスラエルが1982年にメナヘム・ベギン首相に西ペイルートを破壊したことを「ホロコースト」と非難したことで有名だ。

イスラエルは、建国以来このような抑圧と恐怖を行ってきた唯一の米国の同盟国である。長年にわたり、民主党政権と共和党政権の両方で、イスラエルの度重なるテロ行為を非難してきた。しかし、今日、バイデン・ハリス政権はこれらの慣行を極端に支持している。

ハリー・S・トルーマンは1948年5月にイスラエルを承認したが、11月に再選されると、「ユダヤ人が難民問題に取り組んでいる」方法に対する「嫌悪感」を書いた。その後、後継者のドワイト・アイゼンハワーは、英国首相として復帰したウィンストン・チャーチルとともに、1953年11月に国連安全保障理事会でイスラエルを非難した。

タイム誌によると、イスラエルの将来の首相となるアリエル・シャロン大佐率いる空挺部隊は、ヨルダン支配下のヨルダン川西岸キビヤ村で「見つけた男、女、子供を全員射殺」し、69人を殺害した。ベングリオン首相は「反ユダヤ主義だ」と叫んだ。

アイゼンハワーはイスラエルを2度非難した。1955年3月、自称イスラエルの「テロ部隊」がエジプトを非難しようとカイロとアレクサンドリアの米国領事館図書館を爆破し、続いてエジプト支配下のガザを攻撃して38人を殺害した後、そして1956年3月にはシリアに対するいわゆる「報復」で兵士と民間人56人を殺害した。

「1949年から1956年の間に、イスラエルの国境沿いで2,700人以上、おそらく5,000人ものアラブ人侵入者が[イスラエル軍]、警察、民間人によって殺害された」とイスラエルの歴史家ベニー・モリスは書いている。「殺害された人々の大半は非武装だった」彼らは羊飼い、農民、ベドウィン、難民だった。

アイゼンハワーはイスラエル大使アバ・エバンの自衛の主張に納得せず、イスラエルは数十年にわたって極めて非対称的なテロ事件を引き起こし続けた。

1956年10月、イスラエルはテルアビブ近郊のカフィールカシム村で約49人の民間人を殺害した後、エジプトに侵攻し、直ちにハーン・ユニスとラファの難民の虐殺を開始した。アイゼンハワーはこれに対し、米国はイスラエルに「制裁を課す」と宣言した。イスラエルが依然としてガザとシャルム・エル・シェイクからの撤退を拒否すると、米国大統領はイスラエルの米国金融市場への

オリープの会通信 第47号(通巻53号)

アクセスを遮断すると脅した。イスラエルは撤退した。

1966年11月、リンドン ジョンソンは再び「パレスチナ問題」を国連の議題に挙げ、イスラエルを非難した。今回は3,000人以上の兵士が参加したヨルダンへの大規模攻撃の後だった。「イスラエルは我々の利益と自国の利益に多大な損害を与えた」と国家安全保障顧問のW W ロストウは結論付け、「彼らは暗黙の協力体制を破壊した」と付け加えた。

1967年に全面戦争が起こり、その後イスラエルはヨルダン川西岸、ガザ、東エルサレムを占領した。建国以来イスラエルのアラブ人住民に課せられていた戒厳令は1966年に解除されたが、ジミー・カーターは、イスラエルの不法入植開始後に占領下のパレスチナ領土のパレスチナ人に課せられた状況を「アパルトヘイト」と呼んだ。

1982年までに何も解決されず、元イルゲンテロリストで英国当局に反対していたベギン首相は、パレスチナ解放機構(PLO)を「破壊する」と誓った。彼は、当時の国防大臣アリエル・シャロンがベイルートで約1万8000人のパレスチナ人とレバノン人を殺害した事件。その多くは民間人だった。レーガン大統領は遅ればせながら、イスラエルの米国への依存のため電話で虐殺を止めた。その時、彼はイスラエルの猛攻撃を「ホロコースト」と表現した。

しかし、そのような重みのある言葉を使ったにもかかわらず、ホワイトハウスは国連にイスラエルの非難を要求しなかった。米国は1967年の戦争から生じたイスラエルの違法入植地に関してさえ、イスラエルに制裁を課そうとはしなかった。イスラエル駐米大使マイケル・オーレンは、2007年の著書『権力、信仰、そして幻想：1776年から現在までの中東におけるアメリカ』でその理由を説明した。1970年代半ば、イスラエルの支持者は「議会の意見を左右するのに必要な財政的、政治的影響力」を獲得し始めた、と彼は書いている。つまり、国連やその他の場所でイスラエルに対する米国の公式反対を阻止するのに十分な力を獲得したということだ。それ以来、イスラエルは、極めて不釣り合いな残虐行為の記録にもかかわらず、米国の支援を当然のこととみなしてきた。

1991年、国連交渉官フォルケ・ベルナドッテの殺害を承認したイスラエルのイツァーク・シャミール首相は、

ユダヤ人にはテロが「容認できる」のにアラブ人にはそうではない理由を説明しようとした。パレスチナ人は「自分たちのものではない土地のために戦っている。これはイスラエルの人々の土地だ」。

10月7日のハマスのイスラエル攻撃は際立っていた。パレスチナの抵抗グループが数十年にわたるイスラエルのテロに同様の規模で反応できたのは、このときだけだった。この攻撃に対して、イスラエルのベンヤミン・ネタニヤフ首相は、飢餓と病気に支えられたイスラエルの度重なる大量殺戮をさらに強化した。米国政府は「あり得る大量虐殺」を阻止するための意味のある措置を講じなかった。

現時点では、イスラエルは米国民を処罰なしに殺害することをワシントンが認めている世界で唯一の国となっている。ヨルダン川西岸の犠牲者リストは増え続けているが、その中にはアイセヌール・エズギ・エイギ、モハメド・クドゥール、シリーン・アブ・アクレが含まれており、いずれも頭部を撃たれて殺害された。彼らの死後、制裁や身柄引き渡しは行われなかった。ホワイトハウスは単に、狙撃兵による殺害は「容認できない」と示唆し、イスラエルに「調査」するよう求めた。この問題はすぐに却下された。

ガザの苦悩が2年目に入る中、イスラエルによるヨルダン川西岸での殺害は前例のないレベルに達し、レバノンは再びイスラエルの自称報復の標的となった。イスラエルのパトロンは、武器の輸送を中止させるために、つぶやく以上のことを求めている。ワシントンは、アパルトヘイトを含むイスラエルの残虐行為を支持するのをやめるだけでなく、英国と同様に、最終的にイスラエル首相も対象になる予定の国際刑事裁判所の起訴を支持することもできる。

過去の米国大統領は、イスラエルによるベイルートの前回の爆撃の際に、政治家アバ・エバンが「民間人あらゆる死と苦痛を無差別に与えている」と表現したようなイスラエルの行動を抑制しようとしてきた。ワシントンの意思決定者がこれらの大統領の例に倣い、イスラエルへの外交的保護と武器輸出を撤回する時が来ている。
デレク・リーバート

著者、編集者、エписコパル平和フェローシップ顧問
トルーマン図書賞を受賞しており、著書には『Special Operations and the Destiny of Nations』など

パレスチナ日誌

パレスチナ日誌 特別編

アル・アクサの洪水作戦から1年

ガザの蜂起は突然始まったわけではなく、洪水作戦の前から、ガザ国境で西岸に連帯し、ガザ包囲の解除をもとめる抗議行動が繰り返され、イスラエル軍は銃撃や催涙ガスで応戦していた。その結果、死者と負傷者が出ている。この抗議行動は、2023年年初から始まったネタニヤフ極右政権による西岸での弾圧、入植者による入植地の拡大、暴力行為が拡がり、すでにこの時点までに500人以上が殺され、さらにはアル・アクサへの入植者たちへの襲撃、パレスチナ人礼拝者に対する制限と暴力が強まっていたことに対決するものであった。

2023年10月7日 73年の10月戦争50周年に当たり、ユダヤ教の祝日でもある日に攻撃が開始された。ミサイル攻撃とガザの包囲壁を突破して作戦が行われ200人以上の捕虜を確保した。イスラエルは1400人のイスラエル人が殺害されたと発表した。あとで1200人に訂正された。200人はハマスだったとしている。また、偶然行われていた音楽フェスタでは300人以上が殺されたとしている。しかし、遺体がハマスカイスラエル人か分からないという状態は遺体が焼かれていたことを意味し、同時にそれは、イスラエル軍によって、ハマス人質ともに殺されたことを意味している。また、コンサート会場でもイスラエル軍のヘリコプターが無差別に銃撃し、大量の死者がでている。大量虐殺はハマスではなく、イスラエル軍によるものであった。にもかかわらず、ネタニヤフは、ホロコースト以来の虐殺であるとし、「赤ん坊の首切った、強姦した」などのデマを流し、そのデマはことごとく否定されている。しかし、米国はこのデマに同調している。

同日イスラエルは宣戦布告を行い反撃を開始した。

10月8日レバノンのヒズボラがイスラエルに向けてロケット弾を発射
8日から9日にかけてガザの500か所を空爆。ガラント国防相はガザの完全封鎖を命令、パレスチナ人を形をした獣とよんだ。ネタニヤフは、旧約聖書を引用し、記憶にいたるまで、一掃しなければと叫びた。この時点で、イスラエルの絶滅戦争の口実にされた。

9日に米英独仏伊が共同声明でイスラエルを支持を表明。

中国、カタルは中立的立場、ロシアアラブ連盟も

10日ハマス460発のロケット発射、イスラエル軍は、ガザで爆下を続け、インフラを全面的に破壊した

11日イスラム聖戦のアリ・ハッサン・ガリ司令官が殺害された。

米国のハーバード大学学生イスラエルを批判

イスラエル戦時内閣を作る

米国は空母打撃軍に新たな空母打撃軍加えた。

12日プリンケンイスラエル入り

フランスパレスチナ支持のデモを禁止

13日 イスラエルはガザ北部住民に南部へ避難することを命令
白りん弾の使用が確認された。

14日、国連安保理理事会は、ロシアの停戦決議案を否決

ハマスのアリ・カディ、ムラド・アブムラドを殺害

ヒズボラ3人を殺害。ヒズボラはシェーバファームを砲撃

15日イスラエルアレppo空港を攻撃

米国は空母アイゼンハワー打撃群を空母ジェラルド・フォード打撃群と合流させると発表

米国イリノイ州で6歳のイスラム教徒の少年が殺害された。

UNIFILが攻撃された。

ヒズボライスラエル北部に対戦車ミサイル5発発射

16日イスラエルの緊急内閣の閣議開かれる

UNRWAは、1週間で100万人が退避させられた

米国、エジプト、イスラエルガザ南部の停戦に合意、期限付きでラファ検問所が開いた

17日 エルサレム訪問中のプリンケンが18日にバイデンが訪問すると発表した

避難所となっていたUNRWAの学校が攻撃された

夜アハリー病院に爆撃、500人が殺された。

バイデンのよヨルダン訪問が中止に

レバノン国境で、衝突5人の殺害された。攻撃の応酬が始まる

ガザ中部への爆撃で、アイマン・ノフアル司令官が殺害される。

18日バイデンイスラエル訪問

国連安保理でブラジルの即時停戦案米国の拒否権で否決

ガザのギリシャ正教教会が爆撃される。避難民が避難していた。

19日WHOは、ガザで26の医療機関が被害にあったと報告

英国首相イスラエル訪問

フランスでは、禁止にも関わらず、パレスチナ支持のデモが行われた

イスラエルによる西岸への襲撃がおこなわれ、60人以上が逮捕された。

米国防省ミサイル駆逐艦がフーシ派のミサイルとドローン撃墜したと発表。

ラファ検問所をグテレス国連事務総長が訪問。

ハマスは、米国籍の母親と娘を解放した。

ラファから初めて物資が搬入された。

カイロで平和サミットが行われた・

23日イスラエル軍はガザで320か所空爆したと発表

レバノンへの空爆も行った

ハマスは、85歳と79歳の高齢の女性を解放した。

24日マクロンイスラエル訪問

国連安保理閣僚級会合を開催

バイデン、サウジ皇太子と電話会談。

シリアから2発のロケットが発射され、イスラエルがダラーを爆撃シリア兵8人死亡

25日夜ガザ北部に限定的な侵攻、その日は撤退。

安保理で米国の決議案への採決ロシア、中国が拒否権

ガザ保健省は、イスラエルに殺された6800人の氏名年齢などを明らかにした。

ハマス代表団がロシアを訪問

国連総会で休戦を求める決議が採択された。

イスラエルは空爆を強化し、アシファ病院、インドネシア病院などへも攻撃が行われた。 Beit Hamounとブレイジで地上侵攻を始めている。

28日イスラエルは、ジャーナリストの安全を補償できないという書簡を通信社に送った

ネタニヤフは戦争の第二段階を宣言

29日イスラエル軍はガザに追加の部隊を派遣したと発表

ICCハマスとイスラエルの戦争犯罪について捜査

国連安保理が国連総会決議を受けて開催された各国から民間人を保護することを求める声

ハマスは3人の人質の映像を公開

トルコ・パレスチナ友好病院が攻撃された

30日イスラエル軍はシリアの2か所の軍事施設を攻撃

イスラエル軍は一日でガザの300か所を攻撃と発表。7人の人質が死亡

ポリビア、コロンビア、チリが大使を召喚

ジャバリア難民キャンプへ攻撃で150人が死亡120人が行方不明

2023年11月

11月1日イスラエルは、キャンプへの攻撃で対戦車砲部隊のトップを殺害と発表

フランス、アルゼンチンは、難民キャンプへの攻撃を批難

2日にかけて、3日連続で、ジャバリア難民キャンプへの攻撃、国連の学校など27人が支所。シャーティ難民キャンプ、つブレイジ難民キャンプでも攻撃があった。

3日米国議会下院で、イスラエルへの140億ドルの援助を可決

ガザのAFPの事務所がイスラエル軍に攻撃された。

プリンケンイスラエル訪問民間人の犠牲に懸念を表明

オリブの会通信 第47号(通巻53号)

ナスララ師、イスラエルへの闘いにヒズボラやフーシ派が参戦すると声明

日本の上川外相、イスラエルを訪問し、外相と会談

マガシ難民キャンプが攻撃され、40人以上が死亡

プリンケン、ヨルダンで、エジプト、カタールなどアラブの外相と会談。

イスラエル関係が原爆使用をガザで容認する発言

プリンケンキプロス訪問

イスラエル軍がインドネシア病院を攻撃

7日に国連安保理で即時停戦に向けて協議。米国は否定的な立場をとった。

シファ病院を占拠し、ハマスの武器や装備を発見したと報道

15日、安保理戦闘の一時停止と人道回廊を求める決議を採択(ロシア、英国、米国が棄権)

19日イエメン沖で日本郵船の自動車運搬船が拿捕された

23日イスラエルとハマスが50人の人質の解放と引き換えに4日間の停戦に合意したと発表。24日から停戦し、50人の人質を解放し、イスラエル側から150人の女性と子どもが釈放された

25日人質17人が解放され、イスラエル側は39人を釈放した。

26日も人質17人を解放し、イスラエルも39人を釈放した。

27日も、人質11人を解放し、イスラエルも39人を釈放した。

2日間の延長で合意

28日人質12人が解放され、イスラエルも30人を釈放した。

29日人質16人を解放し、イスラエルも30人を釈放した。

30日停戦が破綻イスラエルによるガザ南部への侵攻が開始された。

12月

1日イスラエル、第7陣のイスラエル人拘留者の受け入れを発表

停戦終了 - ガザ各地への襲撃と砲撃

2日占領軍は戦闘再開以来、ガザ地区で400の標的を攻撃していると発表した。

11日占領軍がガザ北部のカマル・アドワン病院を包囲

16日米国防総省、米空母にイスラエル沖に留まるよう命令

12月26日イスラエル軍は、ガザ中部に拡大

28日占領軍はガザのヤルムーク・スタジアムを拘置所に変える

12月29日の時点でパレスチナ側の死者2万1507人に達した

2024年1月

1日2024年の始まり： カッサム、テルアビブに向けてロケット弾を発射

1月2日南ベイルートのハマスの事務所で3人の幹部殺害される。ハマスが、レバノンのベイルート南部郊外での爆発で、サレハ・アル・アロウリと2人のカッサム指導者が暗殺されたと発表。

1月7日テルアビブとハイファで、ネタニヤフ首相とその政権の退陣を要求する大規模なデモが行われた。

1月10日イスラエルがパレスチナ人に対する虐殺容疑で初めて国際司法裁判所に出廷

1月11日国際司法裁判所におけるイスラエル裁判の初会合が始まる

1月16日イラン イラクとシリアでの攻撃は、われわれを脅かす勢力を抑制することが目的だ

1月26日国際司法裁判所が南アフリカによる対イスラエル訴訟を受理
ワシントン、10月の襲撃事件への職員関与の疑いでUNRWAへの資金援助を停止

2月

2月1日の時点でフランス通信社の再集計で、10月7日のイスラエルの死者は1163人と発表

2月2日イスラエル政府高官 ガザ暫定緩衝地帯を建設中

2月5日占領軍： 開戦以来、ガザの戦闘で兵士562人が死亡、540人が負傷

2月14日南アフリカ、イスラエルによるラファ攻撃の可能性についてICJに緊急要請を提出

2月15日国連報告書 ラファの住民はデイル・アル・バラとアル・ヌセイラート・キャンプに避難した

2月26日独立委員会、国際裁判所の決定に対するイスラエルのコミットメントの程度に関する特別文書を発表

2月27日時点で2万9878人のパレスチナ人の死者

イスラエル、国際司法裁判所に反論： ガザでは国際法の原則に違反していない

2月29日ラシッド通りの虐殺、死者104人に

3月

3日イスラエル軍、アル・アマル病院包囲を42日目も継続

3月13日レバノン、イスラエルに対する新たな提訴を安保理に提出

3月14日侵略開始以来、ヨルダン川西岸で7585人を逮捕

レポート バイデン政権、ラファでのイスラエルの限定作戦を支持

3月15日ネタニヤフ首相がラファ戦争計画を承認、交渉のため代表団をドーハに派遣

3月17日ネタニヤフ首相 ラファを攻撃し、市民を避難させる

3月19日占領軍、アル・シファ病院でのパレスチナ人50人殺害と180人逮捕を認める

3月20日までに殉教者3万1819人に

3月22日米議会がUNRWAへの資金提供を禁止する法案を提出

3月28日国際司法裁判所、イスラエルに援助物資のガザへの無制限入国を命令

4月

10日ワシントン イスラエルがガザで「大量虐殺」を行ったという証拠はない

国連報告書 ラファの住民はデイル・アル・バラとアル・ヌセイラート・キャンプに避難した

1日イスラエルはダマスカスのイラン大使館を攻撃、

13日にイランが報復。イスラエルも19日にイランに報復

モハマド・ムスタファがシュタイエから首相に就任

4月2日革命防衛隊 イスラエルによるイラン領事館襲撃で准将2人と将校5人が死亡

17日までに3万3843人が殉教

4月26日イスラエル軍、ガザ海岸に浮きドック設置の承認を発表

4月27日中国がハマスとファタハの和解協議を主催

5月

4日アメリカ、ガザでの浮体式ドック建設を一時中止し、アシドッドに移す

5日ガザの殉教者3万4654人に

10日総会は本日、パレスチナ国の正式加盟資格に関する決議案を採決する。

11日瓦礫に埋もれたのままの遺体が1万1千体あると民政防衛局

13日UNRWA：この1週間で36万人がラファから避難

16日UNRWA：イスラエルの攻撃激化以来、60万人のパレスチナ人がラファから避難

28日ロイター 占領軍戦車がラファ中心部に進入

国連安全保障理事会は火曜日、ラファの避難民を標的とした襲撃事件に関する緊急会合を開催する。

31日36284人が殉教、82057人が負傷

6月

1日バイデン米大統領、ガザ終戦のイスラエル案を発表 ハマス「前向き」検討と

OCHAは、西岸でイスラエル軍と入植者によって500人以上のパレスチナ人が殺されたと発表

8日エジプト、イスラエルによるヌセイラート・キャンプ襲撃を非難
 9日ネタニヤフ首相：戦争の目標を実現するので取引はなかった。
 17日ガザ南部のラファ交差点で出国ホールを焼く占領軍
 20日ガザ臨時港、本日本曜日から操業再開、5月17日に設置された
 26日安保理、イスラエルの植民地活動全面停止で全会一致合意
 29日ガザ地区を分割する... ガラントがガザを管理するためにアメリカに提示した計画の詳細
 ペンタゴン、悪天候によるガザ港ドック解体を発表
 30日イスラエルの80カ所で数万人がネタニヤフ政権に反対するデモを実施
 10月7日以降、37,626人が殉教し、86,098人が負傷した。

7月

2日陸軍、ラファ作戦はあと4週間続くと予測
 3日安保理、ガザの人道的大惨事に対処するための援助提供の必要性に全会一致で合意
 4日ネタニヤフ首相はバイデンに、イスラエルはすべての目標を達成した後には戦争を終結させることを約束すると語った。
 9日カービー：バイデン大統領の提案は、この紛争にきっぱりと終止符を打つだろう
 11日レバノンの健康 戦闘開始以来466人の殉教者
 13日118カ国が地域安定の柱としてUNRWAへの支持を表明
 7日占領軍がガザ中心部で新たな作戦を開始
 19日ワシントンが、浮きドック経由のガザへの援助物資輸送プロセスの終了を発表
 イスラエルの決定により、ヨルダン川西岸地区Bのパレスチナ人家屋の取り壊しが許可される
 国際司法 占領は違法であり、イスラエルはパレスチナ自治区から撤退しなければならない
 22日占領軍、ロケット砲撃の再開を受け、カン・ユニの一部の避難を命令
 24日レポート イスラエル、パレスチナ自治政府へのガザ譲渡を否定せず
 25日ネタニヤフ首相が初めてホワイトハウスに到着：これがバイデンへの質問だ
 27日までに3万9175人殉教者に
 29日ハマス ネットニヤフ首相、米国の停戦提案に条件と要求を追加
 31日イランの衝撃 ハニエ暗殺への世界的非難と対応の脅威

8月

4日カービー：我々は引き続きこの地域に追加部隊を派遣する
 7日ハマス シンワルが運動のトップに
 15日までに4万0005人が殉教
 21日イスラエルは「キャンプ・デービッド」協定を修正し、フィラデルフィア軸におけるイスラエル軍の駐留を確保するよう要求した。
 23日占領軍はベイトラヒアの広大な地域の住民に強制避難を命令。
 31日イスラエル軍、ガザでのポリオ予防接種キャンペーンの日程と場所を発表
 ジェニン 占領軍は市内の道路の70%以上をブルドーザーで破壊

9月

2日23個大隊が活動中... 占領軍はヨルダン川西岸への追加部隊派遣を決定
 アル=ハイヤ フィラデルフィア、ネツァリム、ラファ交差点から撤退しなければ、合意は成立しない。
 テルアビブとエルサレムでのデモ
 5日ガザとラファへの空襲、そして占領によるポリオ予防接種の阻止
 6日占領軍がナブルス南部の市民と連帯していたアメリカ人活動家を殺害
 8日までに4万0972人殉教に

UNRWA：昨年10月以来、ガザ地区の200校が閉鎖されている
 数万人がテルアビブでネタニヤフ政権に反対し、合意を求めるデモを行う
 10日占領軍はトゥルカラム・キャンプへの攻撃を続け、住民のほとんどを強制退去させた。
 17日北部の緊張激化。 ガランは軍事的解決を求め、アメリカは地域戦争に警告を発する
 更新 - レバノンの通信機器爆発で子供を含む9人の殉教者と2,750人の負傷者
 19日更新 - レバノンの通信機器爆発で子供を含む9人の殉教者と2,750人の負傷者
 20日イスラエル軍、レバノン南部の100基以上のミサイル発射台を標的に
 21日イスラエル軍 レバノン南部で180の標的がイスラエルへの攻撃を準備
 25日戦争で初めて... ヒズボラがテルアビブを標的に
 28日イスラエル軍、ハッサン・ナスララ暗殺を正式発表

10月

1日イスラエル軍、レバノン南部で地上作戦を開始と発表
 2日レバノン：
 10月8日以来1873人の殉教者
 17日ネタニヤフ首相：シンワルの暗殺はハマスの戦後であり、われわれは今、地域の平和と繁栄を達成する絶好の機会を手に入れている。
 18日までに4万2175人に





ベイルートは私たちの星

目は砂のためのものである

ベイルートは私たちの星

初めに私たちは創造されなかった、初めに言葉があった

ベイルートは私たちの星

そして今、塹壕に妊娠の特徴が現れた

ベイルートはリンゴ、心は笑わない、そして私たちの包囲は滅びゆく世界のオアシス

ベイルート、ああベイルート

私たちは広場で踊り、ライラックと結婚する

ベイルートは私たちのテント、ベイルートは私たちの星

ベイルート、ああベイルート、ベイルートは私たちのテント

youtubeで

ベイルートは私たちの星、ベイルート、ああベイルート

beyroun najimatouna

検索で聞くことができます。歌手は Marcel Khalife

夜が過ぎるまで私たちは塹壕を離れない ベイルートは絶対者のためのものであり、私たちの

おいしいパレスチナ

Galayet Bandoura (フライパンで作るトマト)



フライパンにエキストラバージンオリーブオイルを熱し、つぶしたニンニクと青唐辛子を加えます (唐辛子の量は好みの辛さによって異なります)。辛い料理が苦手であれば、この料理は少し辛めにするをお勧めします。ニンニクが黄金色になるまで炒めたら、後で上にかけるニンニクの半分を取り除き、残りのニンニクと油はフライパンに残し、トマトを加えます。トマトはどんな種類でも使えます。丸くスライスしても四角く切っても大丈夫ですが、熟していて水分が多すぎないトマトを選ぶことが重要です。今回は、半分に切ったグレープトマトを使用しています。

トマトを蓋をせずに強火で約 10 分間炒め、トマトの形を保つために最小限のかき混ぜで、料理の見た目を良くします。塩と砂糖を加えて軽く混ぜます。砂糖を加える理由は、砂糖が塩とトマトの酸味と混ぜると、味が酸っぱくなるからです。

中火でさらに 10 ~ 15 分、トマトが完全に火が通って柔らかくなるまで煮込みます。終わったら、残りのニンニクと唐辛子を上に広げます。火を止めて、温かいうちにクブズ(アラビアのパン)を添えてお召し上がりください。アラビア語でガミスとは、パンを食べ物に浸すという意味です。

材料

1 ベビーグレープトマト1箱 (または中サイズのトマト3 ~ 4 個)

つぶしたニンニク 4 ~ 5 片

エキストラバージンオリーブオイル ¼ カップ

辛い唐辛子 1 本

砂糖 ¼ ティースプーン

塩

調理モード 画面が暗くなるのを防ぎます

手順

フライパンでエキストラバージンオリーブオイルを熱し、

つぶしたニンニクと青唐辛子を加えます。黄金色になるまで炒めたら、ニンニクの半分を取り除きます。これは後で上にかけます。残りは油を含めてフライパンに残しておきます。

トマトを加え、強火で約 10 分間、あまりかき混ぜずにトマトを炒めます。

塩と砂糖を少し加えて軽く混ぜます。中火でさらに 10 ~ 15 分、トマトが完全に火が通って柔らかくなるまで調理します。

終わったら、残りのニンニクと唐辛子を上に広げます。火を止めて、温かいうちにホブズ(アラビアのパン)と一緒に召し上がりください。



アルジャジーラのガザ特派員ヒンド・ホダリーさん

今号の内容

- ガザ蜂起1周年、抵抗闘争は続く・・・・・・・・・・・・・1
- 大虐殺の終わりは見えない・・・・・・・・・・・・・3
- 脱植民地化と崩壊の間・・・・・・・・・・・・・5
- パレスチナ農民の生存の闘い・・・・・・・・・・・・・7
- イスラエルの忘れられたテロ・・・・・・・・・・・・・9
- なくアメリカ人を殺害・・・・・・・・・・・・・10
- パレスチナ日誌・・・・・・・・・・・・・11
- パレスチナの愛した歌・・・・・・・・・・・・・14
- おいしいパレスチナー・・・・・・・・・・・・・15
- トピック・・・・・・・・・・・・・16



シンワールのように



10月11日ノーベル平和賞の被団協の代表委員、平和賞はガザを支援する人々に。広島と同じ状況



福岡のパレスチナハウス



10月7日蜂起以下年で各地デモ 関西での抗議行動



10月9日ユダヤ人労働者が米国議会を占拠